愛知大学「名古屋ぶらり学」で巡る熱田台地と堀川

愛知大学
経営学部 教授
古川邦之
Kuniyuki Furukawa

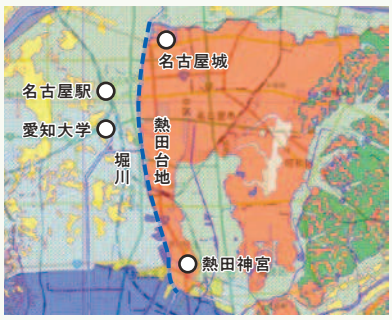
愛知大学では、社会にあるさまざまな境を越え、人との出会いや気付きを促進することで、社会課題の解決とそれを担う人材の育成を目的とした、ASITASIA（アシタシア）という地域連携教育のプロジェクトを展開しています。このプロジェクトの一環である「名古屋ぶらり学」というユニークな授業は、名古屋の発展に不可欠であった要因を見つけ出し、時間や空間、人的な枠組みを超えた探求を行うことで、名古屋の本質的な魅力を発見することを目的としています。

本稿ではその一例として、堀川周辺を実際に歩きながら、これまで学生たちが意識しなかった地形と歴史に関する新たな視点を見いだす様子を紹介します。

01 はじめに

日本の真ん中に位置する“名古屋”は言わずと知れた大都市で、日本の産業や商業などの経済活動を支える主要な地域と言っても過言ではありません。ではそのような地域へと発展した要因は何か、と考えればいろいろ出てくると思いますが、最も大きな要因は名古屋城とその城下町の存在ではないでしょうか。名古屋城は1600年の関ヶ原の戦いの後、徳川家康の指示により天下普請で築かれましたが、お城を中心に城下町が作られ、当時の町割や産業は現在にも引き継がれており、経済活動の基盤となっています。

もう少し深掘りしてみましょう。では名古屋城と城下町はなぜ今の場所が選ばれたのでしょうか。それはもちろん偶然ではありません。“熱田台地”の存在が大きく関わっています（図1）。



▲（図1）熱田台地と堀川

象の鼻のような形の熱田台地は周囲の平野に比べ古くて硬い地層でできており、河川の侵食から取り残されてできました。標高差は場所によりますが10m前後です。そのため熱田台地の周囲には低湿地が広がっており、徳川家康はその地形に目を付けました。関ヶ原の戦いに勝利した後、大阪方面からの豊臣方の攻撃に備えるため、西側が遠望できる台地上、かつ北と西が低湿地で防御に適した台地の北西の角に名古屋城を築き、さらにその南には城下町を作りました。城や城下町を築くには大量の材木が必要となり、それには木曽のヒノキが使用され、木曽川を下り運搬されました。と言うものの材木が届く熱田の港（現在の熱田区にある宮の渡し公園付近）から城までは7kmもあり、陸上での運搬は困難でした。そこで家康は福島正則に、熱田台地の西のへりに沿って運河を開削するよう命じました。こうして作られた“堀川”を利用することで材木を効率よく城へと運搬できるようになりました。

堀川は、1907年(明治40年)に名古屋港が国際貿易港として開港して以降も、輸出入貨物の運搬の要路であり続け、名古屋の経済発展を支えてきました。これらの地形的要因は、直接的ではなくとも、名古屋の発展の基盤となる重要な役割を果たしてきたと言えます。つまり現代の名古屋を形作るための不可欠な土壌として機能していると言えるのです。

▲堀川に立つ福島正則像

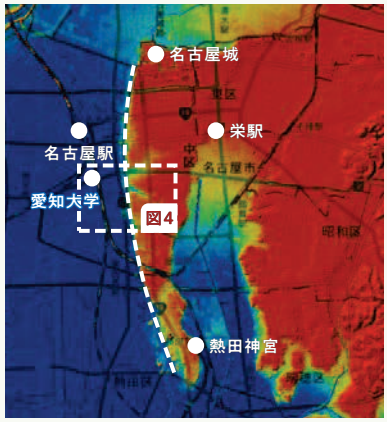
▲天王崎橋から見た堀川

02 標高図を作ろう

愛知大学名古屋キャンパスは旧国鉄笹島貨物駅跡地のささしまライブ地区にあり、名古屋駅からも程近くにあります。みなさんは熱田台地の登り坂のことをご存知でしょうか。名古屋駅から東に向かうと堀川があり、それを超えると登り坂となり、熱田台地上にある伏見や栄地区へ到着します。しかし、学生たちはそこへは地下鉄で行きますので、その高低差を理解している学生は皆無に近いでしょう。そのため1回目の授業では、まず熱田台地の地形を理解するため地図の実習を行い、2回目に実際に外を歩きます。実習には国土地理院の提供するウェブ版の“地理院地図”を使用し、まずは大学と周辺の位置関係を理解します (図2)。

▲（図2）愛知大学と周辺の位置図

次に、地理院地図の機能“自分で作る色別標高図”を使って、名古屋周辺の地形を可視化します。大学周辺の標高が約2m、熱田台地上にある白川公園が約10mですので、これを0.5m間隔で色分けしてみます。すると、熱田台地がくっきりと浮き上がり、名古屋の商業地域が意外に起伏に富んでいることが視覚的に理解できます (図3)。



▲（図3）愛知大学と周辺の色別標高図

また港のあった熱田と名古屋城がそれぞれ台地の南と北の端に位置しており、名古屋城や城下町を作るための物資運搬に堀川がいかに重要であったのかがよくわかります。さらに0.5m間隔という詳細な色分けの図を作成することで、愛知大学名古屋キャンパスの東側に2つの谷があることに気付きます (図3の四角、図4)。これらは現在の若宮大通と大須通にあたりますが、実はかつての河川の流路で、それぞれ紫川と七志水川（ななしみずがわ）と呼ばれていました。これらは城下町が発達する熱田台地からの排水機能として重要な役割を果たしていました。

03 ぶらりに出発♪

2回目の授業では、前回作成した色別の地図を持ち、地形を確認しながら街歩きをします。大学を出て大須通を東に向かうと、最初に難読名称の交差点“水主町”が現れます。さて何と読むのでしょう?これは“かこまち”と読みます。水主(かこ)は“すいしゅ”とも読みますが、船を操る人のことで、ここでいう船は尾張藩の軍用船を指します。この周辺には水主が多く住んでおり、それが由来となった水主町という地名が現在に残されています【地点①】。

▲【地点①】水主町交差点

では交差点からさらに東に行きましょう。すると登り坂が現れます。地図を確認すると熱田台地のへりにやってきたことがわかります【地点②】。

▲【地点②】水主町交差点より東に向かって登り坂

少し登ると、南北に流れる堀川が確認できます【地点③】。堀川の河口部には水位調節するための閘門がありませんので、流向は潮の影響を受けます。つまり時間によっては名古屋城のある北方向に流れていることもありますので、勘のいい学生はそれに気付いて不思議がります。さらに東に行くと、そこは七志水川のかつての流路です。大須通から北を見ても南を見ても上り坂、つまり谷の中にいることがわかります。また伏見通の少し手前まで行くと流路は大須通から南の脇道になりますが、そこでは大きくえぐれた谷地形になっています【地点④】。

▲【地点④】矢印の方向が流路

そこを抜け伏見通に出たら北に向かい、白川公園まで行きます。東西の道は若宮大通で、紫川のかつての流路です【地点⑤】。若宮大通は100m道路と言われる幅の広い道ですが、これは戦後の都市計画において自動車の普及が加速することを見据えて整備されました。ここで学生は、この谷が排水機能から近代都市機能へと、時代と共に変化したこと

に気付きます。

若宮大通を西に向かう途中、七志水川同様にやはり両側の道が上り坂になっており、谷底であることがわかります【地点⑥】。そして堀川までたどり着くと、そこには洲崎神社があります【地点⑦】。洲崎神社は9世紀

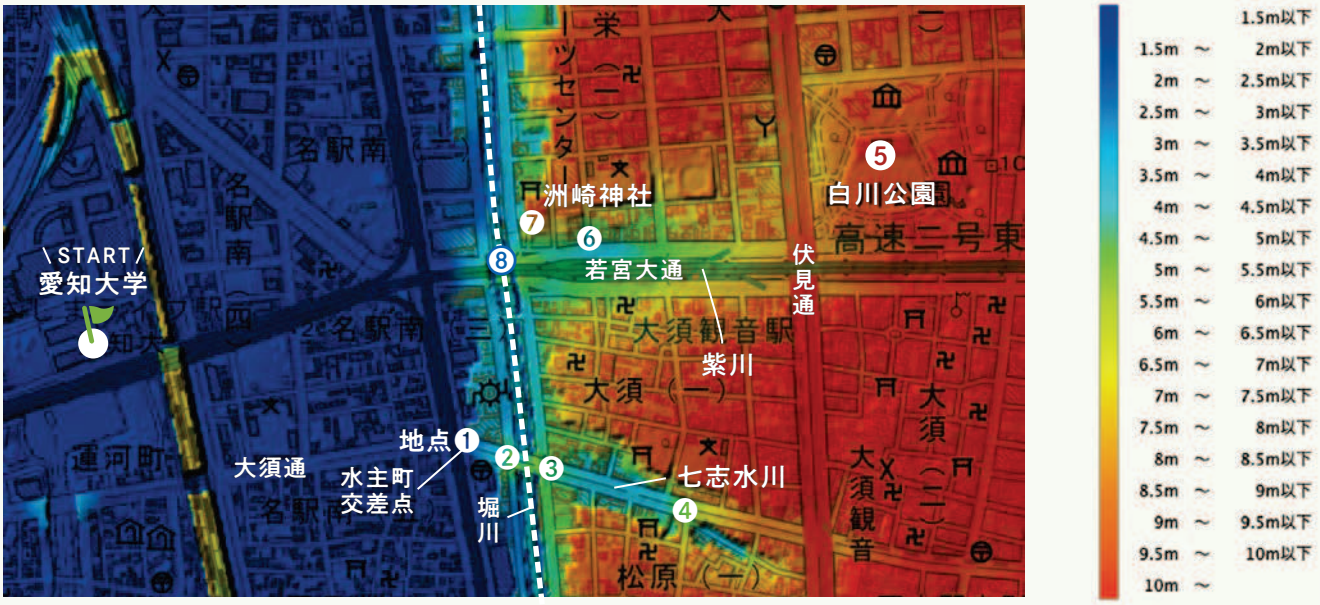
▲【地点⑦】洲崎神社

に創建された歴史ある神社で、福島正則はここで堀川開削の成功を祈願したと言われています。また洲崎神社には尾張藩の船奉行を務める家系である千賀氏の屋敷があり、千賀氏の配下の船乗りたちも周辺に住んでいました。そうなんです、その地域が水主町なのです。学生たちと洲崎神社を参拝すると、やはり本殿までは坂を登ります。また境内から西側の堀川の方を見ると、だいぶ下に道路が確認できるので、そこが崖の上であることがわかります。最後に、若宮大通が堀川と交わる橋、新洲崎橋の上から、下流側の左岸を見てみます【地点⑧】。すると、そこには古そうな排水口が見えますが、それは道路の下に埋設された、要するに暗渠(あんきょ) となった紫川の出口です。つまり紫川は見えないだけで現在も地下を流れ続けているのです。

▲【地点⑧】新洲崎橋の上から紫川の出口を見る

おわりに 04

このような授業により学生は、地形、歴史、そして地域発展との深い関わりを理解することで何気ない坂道も、その背景にある意味を知ることで、重要な景観へと変わり、これまで気づかなかった街の潜在的な魅力に目を向けるようになるでしょう。それは表面的なものではなく、その土地固有の本質に近い魅力と言えます。このような学びを通して、地域を多角的に分析する力が磨かれることで、真の地域振興を担える人材が育つことが期待されます。そのような人材の活躍によって、名古屋のみならず日本各地に活気が生み出されることを願っています。



▲（図4）愛知大学と周辺の色別標高図（詳細）

名古屋ぶらり学のInstagram

@nago_bura

古川邦之 Kuniyuki Furukawa
愛知大学経営学部 教授

地球科学、特に地質学が専門。
地層がきれいな崖を発見するとテンションが上がる。
日間賀島や篠島、東京の神津島、大分県の姫島など、調査地はなぜか離島が多い。名古屋の推し場所は七里の渡し。